

山陽道探究
（富田篇）

會員 西村修一

「上かたみち」の道しるべ

山陽道を歩くと、石柱や木柱に刻まれ、書かれた道しるべに遭遇します。

代表的なものが、郡境碑。周南地域には、佐波郡と都濃郡の郡境碑（椿峠^{だち}）、都濃郡と熊毛郡の郡境碑（大河内）、熊毛郡と玖珂郡の郡境碑（中山峠）と贅沢にも三つもある。因みに、椿峠の郡境碑には、二面にそれぞれ「従是東都濃郡」「従是西佐波郡」と刻まれている。

もう一つは、ほぼ四キロごとに設置された一里山（一里塚）にある道しるべで、富田温田^{あんだ}三丁目のレストラン「ジョイフル」の裏手辺りにあったとされる一里山の道

しるべには「赤間関迄廿三里 安藝境小瀬川迄十三里」とあったと、萩本藩の公用絵図類の作成を担当した絵図方である有馬喜惣太（一七〇八〜六九）による明和元年（一七六四）頃完成の『行程記』や『御国廻御行程記』によって確かめることができる。

周南地域の山陽道において一里塚のあった場所は伝わっていませんが、痕跡が残っているものは一つもありません。これは四境戦争（第二次長州征伐）においてその防衛対策として撤去されたためとも言われています。

郡境碑は復刻モノ、複製品も含めて、周南地域ではすべて見ることが可能ですが、一里塚に建てられていた道



岩国往來の壱里山の道標

しるべについては、すでに述べたように周南地域の山陽道で見ることができません。しかし、岩国往来等に、復元もしくは再現された一里山と木柱があり、イメージすることはできません。

因みに、紀行文を著わした大田南畝おくだななほ（蜀山人。一七四九〜一八二三）は「杙」と表現しています。

街道で普通に見かける上記の郡境碑や一里塚以外にも、「道標」に遭遇します。よく知られているのが、山崎八幡宮前の道しるべ（二一センチ四方、高さ一メートル）です。それぞれ二面に、「右 上かたみち」「左 下のせきみち」と刻まれています。最初見たとき、これは何だろうと戸惑いました。何の石柱で、誰のための道しるべだろう。山陽道用の道しるべなのか、それとも山崎

八幡宮参道のための道しるべなのか。もとはどこにあったのだろう。その時、参道の路側帯という不可解なところにあったのです。

これと似たようなものが、実は同じ富田にありました。かつてホテル松鶴荘の庭の歩道側に建っており、「山陽道」（県教委、昭和五八年）にも言及があります。銘文は「是より左 上かた道」「是より右 下せき道」とあり、山崎八幡宮前の道標ととても類似しているのです。同一の時代や製作者によるものだと考えられます。ただこちらの道標は山陽道沿いになかった。松鶴荘は山陽道より一本南側の道路にあった。しかし、これについては、富田在住の当会の田中賢一元会長より「もとは山陽道と鹿野街道の交差点の北東角のオオバ無線のそばに転がっていて、松鶴荘の主人が持っていたようだ」という証言を得ていた。本来は、政所まさしろの山陽道と鹿野街道の交差点付近に建っていたようだ。

正確にはどの位置に、どのような向きで建っていたのか、田中会長が模型を作製して来られ、詳しく検討する

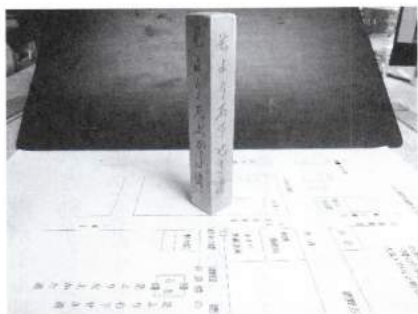
機会があった。段ボール紙の地図上に、道標のミニチュアをあれこれと動かしながら、喧々。大切なのはこの道標を誰が一番必要とするか、誰が見るための道標かという視点である。

鹿野街道は、鹿野からあがる年貢米などを上方に運ぶために、富田津まで馬などを使った物流が盛んであった。またこの交差点から遠く龍文寺を拝んだというから、鹿野方面からやってくる人も多かつただろう。そして、山陽道にぶち当たる。結論から言うと、鹿野街道を富田に向かつてやってくる人たちのための道しるべである。徳山方面に向かう者は左へ、富田津や防府方面に向かう者は右折する。ならば、鹿野街道から見てこのT字路の山陽道の南側正面に、四五度で「是より左 上かた道」「是より右 下せき道」の両面が見えるように建っていないければ用をなさない。

「上かた」は「上方」(大坂)で、「下せき道」は「下関道」であろう。一里塚の道標のように「赤間関」でも良いわけだが、「上り・下り」にシャレたのだと思う。

戻って、山崎八幡宮前の道標を考察してみると、山崎八幡宮参道はそのまま富田津(古市港)に延びていて、こちらにも物流・人通り共に多い。よく見ると、この二つの道標は似ているようで肝心なところが違う。左右(東西)が逆である。検討するなら、この道標は、政所の道標とは違って、山陽道の北側に建っていないと理屈に合わない。すると、古市港からあがって来て山陽道に出る人たちのための道しるべでなければならぬ。

ベストポジションを検討してみよう。山崎八幡宮前の山陽道は「かぎ型」になっており(防衛上、直線路を避けたと言われ、あちこちに見られる)、参道から山陽道へ曲がるコーナー辺りがベストポジションだ。この辺りは土地勘のない者には分かりにくく、NHKの「てくてく旅」の一行もこの辺りで迷っていた。もしこの位置に道標が建っていたら、そういうこともなかっただろう。実は、現在、山崎八幡宮前が再整備されて、新しく再現されている場所こそ(東北角)ベストポジションである。昔の写真を見ると、東北角にあった旧椎木酒店の電柱



鹿野街道と山陽道の
交差点付近のジオラマ



設置し直された政所の道標
(永源山南口駐車場)



仮保管された政所の道標



椎木酒店前の電柱に括られた
宮の前の道標 (昭和40年頃)

参道路側帯に設置された
宮の前の道標 (平成年間)



山陽道から山崎八幡宮参道へ
鳥居横から新町(山陽道)へ



現在の宮の前の道標

に寄り添って括り付けてあり、ほぼ昔の位置辺りを留めていたと思われる。石柱の向きも、コーナーなのでこれで良いと思う。

思索を深くすると、鹿野街道T字路と山崎八幡宮T字路の道標は、鹿野↓富田津へという利用者たちのための一連の道標かもしれない。

政所の道標に話を戻そう。二〇一〇年に松鶴荘が解体されることになり、周南市教育委員会がいったん役所に避難させた。以前より埋まっている部分はどんなふうなんでしょうかと思っていたので、興味深く観察させてもらった。けっこう浅いもので、加工もなく、刻印等の痕跡もなかった。さて、問題は、これをどこに設置し直すかである。政所のT字路付近はほぼ私有地である。

私と田中会長は鹿野街道を重視して、少し上にはなるが、御殿地公園や水分け公園が良いのではないかと考えていて、市教委の川上浩史さんや清水慎也さんは山陽道が良いと考えられた。鹿野街道をたてれば山陽道がたたず、山陽道をたてれば鹿野街道がたたないわけだが、の

ちのメンテナンス等も考慮され、永源山南口前の山陽道沿いの駐車場に決定された。鹿野街道からは少し離れたが、南側に四五度の角度で建てられ、ポランティアガイドなどのガイドには解説がしやすいのではないか。

文化二年（一八〇五）の大田南畝の「小春紀行」に、山崎幡宮前の道標のことが記されている。南畝は福川の脇本陣（福田権兵衛方）で昼餉をして、富田坂（温田峠）を越え「新町」を歩いて、山崎八幡宮に差し掛かった。

*山陽道は本来、古市（本来の「市」）を経由していたが、山崎八幡宮の門前町である新町が発展すると、参勤交代などは新町を利用するようになった。因みに、私たちは「ヤマザキハチマングウ」と呼んでいるが、正しくは「山崎」と表記し、（ヤマサキ）と濁らないで訓む。当会の副会長であった河谷昭彦 宮司さんにご教示頂いた。

「小さき石橋をわたりて左に寺あり。又鳥居あり。八幡宮といふ額あり。八幡の上なる二字未詳。左上かた道、右下津道といふ石表あり」と南畝は記す。

「寺」とは莊宮寺であり、八幡宮の扁額の不明な二字は「莊寺」であろう。有馬喜惣太の絵図にもそのように書き込みがある。

*南畝が見た鳥居を受け継いでいるのはどの鳥居だろう。現在は、秋季例大祭の本山神事（ほんみやま）で山車（曳山）が滑り落ちる坂の両脇と、石段の登り口の三か所にある。明治時代の境内のエツチングを見ると、山陽道から見えるのは、石段の鳥居のみである。扁額には「山崎八幡宮」とあり、後世のものである。

新しく設置し直された道標を眺めながら、江戸時代の
大田南畝もこれを見ていたのだなあと感傷に浸っている
と、ちよつと待てよ。「右 上かたみち」「左 下のせき
みち」ではなくて、「左 上かた道」「右 下津道」だ。「下
津道」という表記だけでなく、左右（東西）が違う。南
畝の誤記なのだろうか。だとすると、南畝はあまりにも
いい加減すぎはしまいか。別物ではないか！ 周南道し
るべ理論から言うと、この道標は南側に建っていて、下
関方面からやってくる人が山陽道の入り口へと道案内さ
れるのが都合がよい。繰り返すが、八幡宮前のカギ型道

筋は土地勘のない者には迷いやすい。下関方面からや
ってきた南畝はこの道しるべのおかげで、NHKの「てく
てく旅」のスタッフとは違って、難なくここを切り抜け
た。

私たちの知らない「道標」が存在したようだ。それは、
今の道標が建っている北東角の、山陽道を挟んで向かい
側の南東コーナー（井本書店前）に想定できそうだ。さ
らに考察するならば、南畝が私たちが見ている宮の前の道
標について記していないので、当時は無かつた可能性が
ある。ただ上方方面に向かう南畝には当面関係のない道
標なので、記さなかつたのかもしれない。

いにしえの鹿野街道 まぼろしの富田御殿

新しく設置し直された水源山南口の市駐車場の、鹿野
街道の道標を、頭の中の鹿野街道の起点である政所の
T字路（政所三丁目三）に重ねてみると、道標が建って
いた当時の風景がイメージできそうだ…と一件落着とい
きたいが、当会の清木素元（せいぎもと）会長が鹿野街道について重

要な証言をしている。

「この度、富田平野の林崇文家より富田御殿の総図面が見つかり、御殿御門は東側東向であることが判明した。御殿東側には水路と道路が今も残存し、この道が政所より鹿野行の最初の道であった。山陽道とこの路と交叉点の所に昔、(ここより北へ三里龍文寺あり)との道しるべがあったと言ひ伝えられている。北九州よりの参勤交代の殿様がここで籠から下り、北の方、龍文寺を拝んだという。鎮西の吉祥山といわれるほど寺格の高い寺であったことがうなずかれる。後に富田御殿の西側裏門の西に鹿野街道が出来、現在の富田・鹿野街道はさらに西に移ったものである。」(徳山地方郷土史研究) 六号、一九八五年)

本来の鹿野街道は今の鹿野街道ではなく、一本東側の水路のある道である、と言っている。すると、道しるべの石柱は、一本東側の交差点のほう(政所三丁目一〇)にイメージしなくてはならない。

—富田御殿はどこにあったのか—「政所新道を北に上

ること数町にして道路の東側約半町の所に在り。徳山藩毛利就訓朝臣(俗に富田様といふ)の隠居御殿の跡なり。当時の庭園にあたりし石燈籠の台石の如きもの尚畦畔にあり。」と『都濃郡誌』(都濃郡役所編一九二四)は記す。「政所新道」というのが現在通称の「鹿野街道」で、清木氏の「富田御殿の西側裏門の西に鹿野街道が出来」は、「政所新道の東側約半町」に対応する。古鹿野街道の間に御殿を想定している。

『新南陽市史』は「富田御殿のある茶の木原は、政所の北部にあたり、土井の仮御殿にほど遠くない場所であった。御殿前には政所から鹿野へ至る通りが南北に通っていた」と記す。

有馬喜惣太の絵図を見ると、水路のある本(古)鹿野街道は、途中からカーブして、今の商家が集中する鹿野街道に合流している。本鹿野街道の西に展開する寺院群と商家群の間にスペースがあり、この辺りに想定できさうだ。しかし、西限を新鹿野街道とするのは、限定しすぎではないか。当時はこの道はない。永源山東麓在住の

佐古組の佐古敏幸氏は、かつて夢風車通りの方まで永源山の山裾が延びていたと証言しているから、夢風車通りの辺りまでは許容可能。今の「御殿地公園」や「水分け公園」のある地域も遠からずもである。「石燈籠の白石」が今どこにあるのかは不明だが、御殿地公園には大きな石燈籠のディスプレイがある。

本来の、政所の道標の場所を想定するなら、現在の読売新聞中央センター付近である。

さらに想像をたくましく考察するならば、鹿野街道↓山崎八幡宮参道↓富田津の道案内を目的とした一連の道標とするならば、南畝の時代において、宮の前の道標



西に湾曲する古鹿野街道。御国廻行程記

とまったく
同一の「左
上かた道」
「右 下津
道」の元祖
道しるべと
いうべき石

表があつたかもしれない。

読売新聞中央センター付近と井本書店前にかつて「左上かた道／右 下津道」という素朴な道標があつたが、一九世紀以降に風化したために、それぞれ「是より左上かた道／是より右 下せき道」「右 上かたみち／左下のせきみち」という立派な石柱の道標に造り直された、というところまでイメージが膨らんだ。

清木氏は、富田平野の林崇文家より出た富田御殿の絵図面についても言及している。これには、周南市の文化史に貢献した思い出がある。

『新南陽市史』口絵に、この敷地図が載る。私にとってこれはほとんど古文書で、お手上げで、当時、古文書読解の第一人者であると私が頼りにしていた当会の金谷一夫理事に解析をお願いした。古文書とはただ文字が読めるというだけでなく、江戸時代の知識や、この場合は建築用語を勉強しなければならぬ、との古文書学の手ほどきも頂いた。訳された現代語を大きな拡大した図面

に張り付けていったいきさつは、すでに「徳山郷土史研究」の二八号（「富田御殿絵図」二〇〇七）で紹介している。完成した屋敷図を載せているので、参照にして頂きたい。コンピュータ入力された綺麗な屋敷図を公表できた。私が地元周南市の歴史学に貢献できた成果の一つだった。

徳山七代藩主毛利就馴は、徳山に初めて「鳴鳳館」という学校を建て、学問を盛んにして、武士の子の教育に尽くして英君と慕われたと、『市史』は書く。藩主として数十年間政治をとり、晩年、富田に隠居して二十数年間の余生を送った。そこが「富田御殿」と呼ばれる。佐



平野林家邸宅



縁側天井部分

藤家長屋門が御殿の一部を移築したと伝えられ、長らく徳山で復元展示されていたが、今は解体されている。同じく富田平野林家邸宅は総屋久杉で張られた天井を持つ見事なもので、当時の様子を偲ぶことができます。二〇〇七年に林家の好意で見せてもらったが、今にも伝わること自体が驚きである。

町を興す殿様石

就馴には有名な「殿様石」の伝承が伝わる。

「富田の茶の木原の御殿の前に農業用の水路があつて、毎年、夏の日照りが続くと、茶の木原と下のほうの百姓がいつも水をめぐって争っていた。ある年の夏は、両方の百姓が大勢集まり、鍬や棒を持つての大げんかに発展した。殿様は見かねて、用水路の途中に大きな石を立てて、流れを二つに分けられた。殿様のされることだから、誰も不平を言う者もなく、喧嘩は収まった。この石はその後、〈殿様石〉と言われるようになった。この石は今もある。」（『新南陽市の民話と伝説』新南陽市教委

今の鹿野街道沿いに新しく整備された「御殿地公園」や「水分け公園」はこの伝承に基づくものである。伝殿様石は、水路に二か所で見ることができ、大きな石が置かれ、横の穴のほうへも水流を分ける。シンプルなものだが、この謂れこそこの文化財に箔をつけている。政所地区を代表する文化財の一つである。少し上のほうにある石は、本来はその少し上方にあった。ご近所に長年住まれる主婦の方々に元あった場所を教えてもらった。確かに、水を分けられたと思われる東に向かう別の水路の名残がある。

一 昨年のことだが、それまで文化財紹介の冊子などに掲載されている写真とは違う異様な姿に驚いた。「殿様石」の数が増えていて、ブロックまで沈めてある。先ほどの主婦の方々に聞くと、すぐ脇にあるアパートの入居者から水が石に当たる音がうるさいという苦情があり、自治会が水流を弱めるために投下したというのだ。歴史的謂れを持つ文化財であることを認知されていないため



「もとは橋のすぐわきにありました」
右手にのびる溝は水路の痕跡



水利権者によって南に移動させられ
余分な石が増えた

に起きたことだろう。ある意味、郷土の歴史文化に携わる者たちの感化不足の責任かもしれない。郷土史会はそのいった使命も担っているのかもしれない。ふと気づくと、水路を覆うコンクリートの蓋が目立ってきた。どうか「殿様石」が隠されることの無いように願います。地域住民の皆さんには、地域の伝統や文化の理解と保存をお願いしたいと思います。